

りんどう

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
花腐菌核病	遅	やや少	(1) 今後2週間、平年より最低気温の高い日が続く見込み（8月28日、気象庁発表2週間気温予報）。 (2) 前年の発生量は、晩生種、極晩生種ともに平年より少なかった。（－） (3) 9月の降水量は、ほぼ平年並の予報。（±）
葉枯病	－	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査での発生圃場率は、平年より高かった。（＋） (2) 9月の降水量は、ほぼ平年並の予報。（±）
アザミウマ類	－	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査での発生圃場率は、平年並だった。（±） (2) 9月の気温は高い予報。（＋）
ハダニ類	－	やや多	(1) 8月下旬の巡回調査での発生圃場率は、平年並だった。（±） (2) 9月の気温は高い予報。（＋）
アブラムシ類	－	並	(1) 8月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。（－） (2) 9月の気温は高い予報。（＋）

記号の説明（++）：重要な多発要因、（+）：多発要因、（±）：並発要因、（－）：少発要因、（－－）：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- 花腐菌核病とアザミウマ類は、収穫が終了した圃場が発生源となるので、収穫後の残った花茎は折り取り、圃場外に持ち出して処分する。
- 収穫が終了した品種でも防除を継続し、本年および翌年の病害虫の発生源となるのを防ぐとともに、株養成に努める。

【花腐菌核病】

- 9月は本病を主な対象に防除を行う。降雨が続く場合には散布間隔を短くして、予防散布に努める。
- 花卉に感染するので、収穫終了後の残花は折り取り処分する。
- 発病茎（特に花の部分）に形成された菌核が翌年の伝染源になるため、発病茎は折り取り、被害残渣を地面に落とさない（図2）よう注意して圃場外に持ち出し、処分する。



図1 花腐菌核病の多発圃場の状況 図2 通路に落ちた花蕾（翌年の発生源）

【葉枯病】

- 翌年の伝染源密度を減らすため、すでに収穫が終了した品種でも、収穫前品種とあわせて9月下旬まで防除する。
- 多発圃場では、上位葉に進展しないよう防除を徹底する。

【褐斑病】

- 薬剤が到達しにくい下位葉や畦の内部、畦の北側など日当たりの悪い場所で発生が多く見られることから、注意して圃場を観察し、発病葉の早期発見に努める。
- 発生がみられる圃場では、翌年の伝染源をなくすため、被害茎葉は取り除いて圃場外へ運び出し、土中に埋めるなどして処分する。

【黒斑病】

- 圃場を確認し、発生がみられた場合は速やかに防除を行う。

【アザミウマ類】

- (1) 花蕾の着色に伴い成虫が飛来し増殖するので、花蕾が着色しはじめた頃から防除を実施する。
- (2) 収穫が終了した品種が発生源となるので、残花や残茎は折り取り処分する。折り取り処分ができない場合は、収穫前品種とあわせて防除する。

【ハダニ類】

- (1) 発生のみられる圃場では、速やかに防除を行う。
- (2) ナミハダニは、9月中旬以降に越冬成虫（オレンジ色を呈する）が出現し、薬剤が効きにくくなるので、防除は9月上旬までに実施する。

【アブラムシ類】

- (1) 栽培期間を通じて防除を実施する。
- (2) 各種ウイルス（CMV、BBWV、CYVV等）を媒介する可能性が高いため、収穫を終えた品種も薬剤防除を行うか、残った花茎を折り取り処分する。

【リンドウホソハマキ】

- (1) 発生が多い圃場では、速やかに効果のある薬剤を散布する。
- (2) 被害茎（図3、4）は折り取り、圃場外で処分する。



図3 茎に形成された羽化孔と
茎食入部の虫糞

※ 蛹は羽化孔周辺に存在する。品種により
差があるが、髓部を食害された部分の茎
が赤くなる場合が多い。



図4 リンドウホソハマキによる
花蕾被害部の着色